

化

文

当時としては巨大事業であった大棧橋などの横浜築港。その原資は、幕末の四国連合艦隊下関砲撃事件で日本が支払った賠償金の一部で、米国が返還した約七十八万ドルを充てたことが知られている。では、なぜ賠償金の返還という政治的な難事が実現したのか……。

◆下関事件の賠償金を返還、大棧橋の原資に◇

横浜港の父グラント将軍

田中 祥夫

六月二日は横浜の開港記念日。日米修好通商条約締結の翌年、一八五九年に開港した。それまでの横浜は半農半漁の小村で、突貫工事で整備したものの、貧弱な港だった。岩倉使節団が乗ったアメリカ号も波止場に着岸できず、岩倉貞規らは三人乗りのほしけで現在「象の鼻」と呼ばれる堤あたりから本船に向かった。今日のような港湾の姿が現れるのは、大棧橋が完成した一八九四年だ。

南北戦争の最高司令官 私は横浜市役所に三十七年間勤務し、主に街づくりに携わってきた。定年後は横浜をつくって来た隠れた恩人探しに取り組んでいる。そして、この賠償金返還の美談の裏で、ある米



横浜港の大棧橋と筆者

艦隊下関砲撃事件までさかのぼる。長州藩が海峡を通過する外国艦船を砲撃したのに業を煮やし、英・仏・米・オランダの四カ国が沿岸の砲台を砲撃し、陥落させた。長州

を見込み、横浜築港がスタートした。その費用の総額は約三百万円で、うち大棧橋には約三十九万円を要した。他の三国が返していないのに、なぜ米国だけ返

下関砲撃の実費が約二万円に過ぎず、巨額の賠償金は弱小国家からの「強奪」だと考えていたことがわかった。一八六九年に就任したグラント大統領は、この返還問題を大きく前進させた。賠償金は前政権のシュワード國務長官が国庫に納めず、国務省保管としていた。これを引き継いだグラントは、教書で「利息とともに返し日

本人の教育に用いるべし」と述べ、たびたび議会に勧告した。しかし、議会は応じない。論戦の末、在任中は返還を果たせなかった。南北戦争の英雄として知られるグラントだが、大統領になってからは不正や腐敗事件が発生するなど、政治家としての評価は芳しくない。ただ、日本とはかかわりの深い

大統領だった。横浜港から旅立った岩倉使節団と会見したのもグラントだった。大統領退任後の一八七九年に、世界視察旅行の最後の訪問国として日本に立ち寄っている。明治天皇にも拜謁(はいえつ)した。この会見でグラントは、米国を含む諸外国との間で結んだ不平等条約の改正などについて天皇に進言したとされる。グラントは下関事件の一部始終を日本で聞いた。帰国後、有力議員に働きかけるなど、賠償金返還の運動を熱心に推し進め、ついに志を果たした。降伏した南軍をすぐ「同胞」と認めた逸話もある。グラントには、思いやりの気持ちが強かったのだろう。

♡♡♡
陰に2人の日本人
忘れてならないのは、二人の日本外交官の存在だ。教育家として知られる森有礼はグラントの大統領在任中に米国に赴任した。駐米公使の吉田清成はグラント来日中に一時帰国し、明治天皇との会見では通訳を務めた。二人は陰でグラントを支えた。

この話には後日談がある。返還に感謝した日本政府は、築地の居留地内にあった米国公使館に代わる新しい公使館の土地を赤坂に購入し、米国に貸与したのだ。

街づくりは土地の歴史を深く掘り下げることもなく進められることが多い。現役時代の反省も込め、恩人や先達に思いをはせる気風をもってもらえれば幸いだ。(たなかよしお 元横浜市職員)